

数理と芸術を巡るフィールドワーク型勉強会の開催

環境情報学部2年 日高一馬

1.はじめに

数理とアートとの関係は、フィボナッチ数列による作曲やプラトン立体など、古来より考えられてきた。しかし、「数学」という特性上、抽象世界に依拠するものであり、現実世界上でこの二つの関係性について考えられることは少なかった。しかし近年各地でアートイベントが盛んであるように、芸術はアトリエやギャラリーを飛び出し、「パブリックアート」や「ランドアート」などの名称で、野外に設置や展示されている。この勉強会は、パブリックな場所に数理的な芸術性が潜んでいると仮定したさまざまな場所でのフィールドワークの実践、輪読などを通じた知識の共有、そしてその両方を通しての芸術性の発見を目的として開催された。

2.活動内容

この勉強会では、パブリックな場所に数理的な芸術性が潜んでいると仮定し、フィールドワークや勉強会を通して、新しい芸術性を発見することを試みた。具体的には、神奈川県の上大岡や東京都の立川、茨城県ひたちなか市、その他東京都内のような野外でのフィールドワークとワークショップの開催、アーティストを招聘しての勉強会などを行った。結果としては、都内において多くのパブリックアートの試みが多く見られた。しかし、直接数理とパブリックアートに結びつくようなものを発見することはできなかった。しかし、その一方で、佐藤雅彦氏の『勝手に広告』というプロジェクト[1]は示唆を与える内容であり、今後の方針として有用であると感じた。

3.今後の展望（むすびにかえて）

今後はこれまでの勉強会に加え、著者が代表を勤める「みなとメディアミュージアム」[2]などを利用し、さらなる作品の発掘に努めていきたいと考えている。

4.参考文献

[1]『勝手に広告』中村至男+佐藤雅彦 2006年9月 マガジンハウス

[2]みなとメディアミュージアム <http://mmm.sfc.keio.ac.jp/>